



# 青少年赤十字だより 第26号

## JRCとやま

昨年の夏、東京の日本赤十字社本社で開催された青少年赤十字全国指導者協議会総会・研修会に参加してきました。その会合で、熊本県の御船中学校の校長先生の話を聴く機会を得ました。御船中学校のある御船町は、熊本地震で甚大な被害を受けた益城町の隣に位置し、熊本県内でも被害が大きかった地域です。その校長先生が話された中に「防災にはその後の立ち直りに向けての在り方も必要である。共同体をどう維持していくかが大切である」という言葉がありました。また、吹奏楽部による地域を励ますための演奏会やボランティア活動、そして、その活動を通して活力が戻ってきた子供たちの紹介もされました。大変重みのある印象に残るお話でした。

この話を聞いた後、被災地の子供たちはどう現状に向き合っているのだから



富山県青少年赤十字指導者協議会

会長 川邊 晃  
(射水市立射北中学校長)

### 被災地で活躍する子供たち

うか、少し調べてみました。自らも避難者である子供たちがバケツで便器に水を流したり、手洗いの際にペットボトルの水をかけてあげたりするなどお年寄りのトイレのサポートをする。食事の配膳や後片付け、掃除、物資の搬入などの役割を引き受け、避難生活を支える。ダンボール製の看板を立て、コーヒーを提供する。「ボランティア」と文字を書いたガムテープを腕に貼り付けて避難所を回る。小さな子供の遊び相手になる。あらゆる場所で様々なボランティア活動に取り組んでいる小学生・中学生・高校生のたくさんの方を見つけたことが出来ました。

彼らは皆、「みんなのためにできることを頑張る」「誰かのために何かできるか」と思いついて始めた「生まれ育った町のために」と言って一生懸命に身体を動かしています。特に心を動かされた

ことは、彼らはいつも周りの人たちに「大丈夫ですか」などと優しく声を掛けながら活動を行っていることです。「きずな」「つながり」という言葉が胸に響き、心が温まってきました。このような子供たちの姿を見た大人たちも、「若い子供が一生懸命頑張ってくれて本当に感謝している。私も元気づけられる」「彼らの姿を見ると希望を感じる。私もまだまだ頑張らない」と、子供たちの活躍に励まされています。きっと私たち大人は、子供の力に将来の日本や世界の姿を見るからでしょう。青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」が、まさにこの被災地で実践されているように思います。困っている人がいれば何とかしたい、これは誰もがもつ気持ちです。この気持ちを素直に行動に移すことが「赤十字」の人道の心となります。最近SNS等の普及により、人の表情を見ない、人の気持ちを考えない一方通行のコミュニケーションによるトラブルが増えてきており、社会的な問題となってきました。このような時代に生きる子供たちにとって、青少年赤十字活動に積極的に取り組み、人々との関わりを通して「気づき、考え、実行する」を身に付けていくことは大切なことではないでしょうか。

今後とも、各学校におかれましては、青少年赤十字の精神をご理解いただき、その活動の推進にご協力くださいますようお願い致します。

### 青少年赤十字研究会に参加して



東部教育事務所  
指導主事 岡村 紀子

北海道から沖縄までの指導主事等五十数名が参加した本研究会は、講演「赤十字と青少年赤十字」から始まり、防災教育事業、海外支援事業、国際交流事業の概要説明の中に、すでに人道の精神があふれていました。奇しくも当日は、今季一番の大雪と重なったことも相まって、ただ知見を広めるだけでなく、何ができるかということを研修を通して考えたいという込み上げる思いさえ覚えました。

文部科学省初等中等教育局 田村視学官の、情報をアウトプットすることや異なる多様な他者との対話が児童生徒の学びに向かう力を高めていくというご講演の内容を踏まえた「赤十字が提供できるプログラム」では、青少年赤十字の目的・目標の「気づき・考え・実行する」とアクティブ・ラーニングの視点の合致する部分について述べられました。

二日目の活動事例発表会では、ワークショップ形式で教材「まもるいのち ひろめるほうさい」の有効な活用、トレーニングセンターへの参加推進の工夫、様々な奉仕活動等、各県の取組が提案されました。かつて不案内だった方が指導者となり普及に尽力されているように、集まった指導主事が防災教育を中心とした画期的なプログラムを学校現場にいかに応用できるかということを実践的に協賛する様が印象に残る意義深い研究会でした。

五月	六月	七月	八月	九月	十一月	一月	三月
指導者協議会 理事会・総会 (日赤県支部) 平成二十九・三十年度 活動推進校指定	第三ブロック指導者協議会長及び支部担当者研究会 全国指導者協議会総会 (東京都) (長野県)	全国賛助奉仕団協議会 (東京都) トレーニング・センター指導者養成講習会 (東京都)	リーダーシップ・トレーニング・センター (砺波市) 県下小・中・高等学校の青少年赤十字メンバーが集まり、二泊三日を共同で生活する体験学習です。チャイムや指示がないので自分で考えて行動することによって自主性を育てます。	指導者協議会 理事会 (日赤県支部)	指導者中央講習会 (東京都)	指導主事対象 青少年赤十字研究会 (東京都) 青少年赤十字活動研究会 (富山市) 教職員を対象に、広く青少年赤十字活動を学び、普及することを目的とした研究会です。	高校生対象 スタディー・センター (山梨県) 高等学校青少年赤十字活動の中心となるリーダーの養成を図ります。

### 平成二十九年JRC活動計画

富山県立上市高等学校 角間 匡之 校長 委員会加盟	富山市立上涌中学校 山元 泰正 校長 委員会加盟	立山町立日中上野小学校 松井 美之 校長 全校加盟	<b>新 加 盟 校 規</b>
---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	----------------------------------

発行・編集  
富山県青少年赤十字  
指導者協議会  
日本赤十字社富山県支部  
〒930-0821 富山市飯野26-1  
TEL 076-451-7878 FAX 076-451-6872  
http://www.toyamajrc.or.jp/

青少年赤十字加盟校状況 (平成29年3月31日現在)

校種	校数	メンバー数
幼稚園・保育園	14園	1,321名
小学校	139校	31,287名
中学校	76校	26,277名
高等学校	15校	1,133名
特別支援学校	5校	236名
計	249校	60,254名

### 青少年赤十字活動研究会

一月三十一日(火)、富山県総合教育センターにおいて、平成二十八年青少年赤十字活動研究会を県教育委員会と共催で開催しました。

研究会へは県内の小・中・高等学校等教員八十一名が参加し、防災教育の重要性と、日本赤十字社が作成した防災教育プログラム『まもるいのちひろめるほうさい』の活用法について理解を深めました。

ここに、熊本県上益城郡山都町立矢部中学校 教諭 佐藤貴文氏による講演「平成二十八年熊本地震の体験を踏まえた、青少年赤十字防災教育プログラムの活用について」の概要をお伝えします。

#### 熊本地震で感じたこと

皆さん、中学校時代、どういう学校生活をお過ごしになりましたでしょうか。実家から中学校までの風景は、覚えていらっしゃいますか。



私は、熊本地震の震源地である益城町の生まれです。これは、四月十六日、いわゆる本震の後に撮った実家付近の写真です。実家に辿り着いたこのような状態になっていて、相当ショックでした。熊本県はあまり地震がない所でした。

ので「自分は地震に遭わないだろう」とこれまで思っていました。が、やはりどこに住んでいても防災教育は必要なんだと痛感したのが熊本地震でした。

今後、先生方も、そして先生方が担当されている生徒・児童・園児の皆さんも、将来地震に遭う可能性は大いにあると私は考えています。本日は皆さんに、防災教育プログラム『まもるいのちひろめるほうさい』からピックアップした二つのプログラムを体験して頂いた後、私が地震で学んだこと、これが大切だということについてお伝えしたいと思います。

#### 「ドローイングチャレンジ」の実践

(プログラム p. 85)



ペットボトルとカラーマーカーで作った大きなペンを人差し指だけで支え、全員で息を合わせて、お題に沿った図形や絵を描く。

まず、ドローイングチャレンジをして頂きましたが、最初よりもチームの輪が形成されて、コミュニケーションが出来たんじやないかなと思います。この活動というのは、スピードの速さや絵の上手さを競うものではありません。実は、どうい

う風にしてその絵が描けたのか、プロセスが大切になります。

#### 「竹ひごタワー」の実践(プログラム p. 83)



竹ひごとマスキングテープを使い、自立するタワーを作る。先端に紙粘土を取り付け、机から紙粘土までの高さを測る。

皆さんの中には、時間を計られた方や、こうしたらいいんじゃないかと意見を出された方がいらつしたと思います。一人では出来ないことも、六人七人いれば出来るようになるということも、たくさんあります。この活動で大事なのは、高さを競うことではありません。意思の疎通をし、細かく分担当した上で活動できたかというのがまず大事になってきます。

熊本地震で学んだこと、それは、やはりコミュニケーションが大切だということです。災害時は予想もできないことがたくさん起こってきます。そのような状況の中では、「意見を出し合う」「協力をする」「冷静に捉える」「判断して決定していく」といった能力が重要となりますが、それらの能力はコミュニケーションによって生まれるものです。今皆さんにやって頂いたように、色々話を

### リーダーシップ・トレーニングセンター

青少年赤十字メンバーを対象にリーダーを養成するとともに、青少年赤十字活動の実践、普及を図ることを目的としています。

八月三日(水)～五日(金)、富山県砺波青少年自然の家にて開催されました。



### 青少年赤十字

#### スタディー・センター

高等学校青少年赤十字活動のリーダーを育成するため、三月二十二日(水)～三月二十七日(月)の六日間、山梨県にて「青少年赤十字スタディー・センター」が開催されました。富山県からは、氷見高校の二名が参加されました。

#### スタディー・センターに参加して



富山県立氷見高等学校 二年 中居 龍星

私は富山県支部のトレーニングセンターでスタッフ長をした経験から、リーダーとしてのスキルアップや国際理解親善について深く学びたいと思い、スタディー・センターに参加しました。

今回多くのことを学びました。その中でも特に印象に残っているのは、理想のリーダーについてです。理想のリーダーとは、どんなリーダーなのかグループに分かれて、話し合う時間がありました。その中で、理想のリーダーになるには、まず、自分をよく知る事が大切だと分かりました。自分のことをよく知り、その中で自分に何が足りないかを考え、足りない部分を増やすことで、理想のリーダーに近づけると感じました。

また、世界の情勢についての学びでは、自分たちが当たり前だと思っていることがそうでは無いと感じました。五歳にならずして命を落とす子どもたちが年間約630万人もいるなど、私たちの今の生活が、どれほど幸せで良いものかを考えさせられると同時に、もっと活動の幅を広げ継続的な支援をする事が必要だと感じました。



今回のスタディー・センターで学んだ事を今後の生活に活かして実践していきたいと思っています。

#### スタディー・センターに参加して



富山県立氷見高等学校 二年 南 ひなの

本校のJRC部では、「防災」をテーマに活動をしています。そこで、防災について深く学ぶとともに他校の活動内容を知りたいと思い、スタディー・センターに参加しました。

初めはとても緊張しましたが、初日の交流ゲームなどで打ち解け、徐々に話すことができるようになりました。

特に印象に残ったのは、防災学習です。刻々と変わる災害の状況に合わせ、どのように対処すれば良いか、グループ毎に考えました。命に関わる事なので緊張感もあり、的確な判断力の重要性を実感しました。

また、センター長が言われた「共助」も大切だと思えました。全国から参加したメンバーや先生からのアドバイスからも「誰かに何かをしてあげよう」という一方通行の考え方は無く、「一緒に活動する」という関係が大切だと学びました。

一人ではできないことも協力し合い、仲間がいれば、どんな高い壁でも乗り越えられると感じた6日間でした。今回学んだ事をこれからの活動に生かしていきたいと思っています。



### 青少年赤十字国際交流事業

国内外の青少年赤十字 (Junior Red Cross) メンバーが交流を深め、JRCの実践目標の一つである「国際理解・親善」を促進することを目的として、平成二十八年度青少年赤十字国際交流事業が開催されました。今年度は、世界二十一の国と地域から三十九名の海外メンバーが来日し、富山県を含む全国の道府県支部に分かれて各地のJRCメンバーと交流しました。

富山県には十月二十九日(土)十一月三日(休)の六日間、マカオJRCメンバー二名(エレン・リエンさん十七歳、マルコ・フェントウーラ・ペレラさん十七歳)が滞在しました。

マカオのメンバーは期間中、県内のJRC加盟校である高岡市立平米小学校、富山市立八尾中学校、富山県立氷見高等学校、富山県立伏木高等学校を訪問しました。平米小学校では習字やけん玉



平米小学校では、国語の授業で5年生と習字に挑戦し、けん玉など日本の遊びを体験しました。体育の授業では6年生とバレーをしました。児童と一緒に学校給食も食べましたが、マカオのメンバーにとって学校給食は初めてだったようです。



氷見高校では、缶詰など備蓄品を使った「震災食」をJRC部員と一緒に作り、実食しました。新聞紙とラップで作られた器も紹介されました。

に挑戦し、八尾中学校ではおわら踊りを体験するなど日本の伝統芸能や文化に触れました。一方、氷見高校では震災食の調理実習を行い、伏木高校では災害について英語で語り合い、また、四季防災館で自然災害や火災を疑似体験することで、防災への意識を高めました。

その他にも、富山赤十字病院、富山県赤十字血液センターでは施設内部を見学し、富山赤十字看



高い山の連なり、冷たい雪、マカオでは見られない富山の自然を体験しました。

### 支部研修スケジュール

十月	二十一日	四季防災館見学 ホームステイ
三十日	富山県赤十字血液センター見学 JRC高校生メンバーとの交歓会	
三十一日	富山赤十字看護専門学校訪問 富山赤十字病院見学 富山市立八尾中学校訪問 富山県立氷見高等学校訪問	
十一月	一日	高岡市立平米小学校訪問 富山県立伏木高等学校訪問 ホームステイ
二日	立山黒部アルペンルート観光 支部研修終了	
三日	青少年赤十字国際交流集會に参加するため東京都へ出発	

### 熊本地震の記録

「想定外」を「想定内」にするというのが防災教育の基本だと思っておりますが、それでもやはり、熊本地震ではいろんな想定外がありました。

「まさか二度も震度七の地震が来るとは」「まさか熊本で地震があるとは」「まさか夜中に来るとは」、そして「まさか避難所が使えないとは」ですが、避難所が被災して使えなくなりました。また、新学期始まってすぐ長期休校になったのも想定外でした。

地震発生直後に、よく考えないといけないかったのは、「どんな資材があるのか」「どこへ避難するのか」として重要だったのが「出ている情報が本当なのか」ということです。ボランティアで焼肉が提供される等のデマが流れました。

とても困ったことは、地下水の宝庫だからこそ断水です。水が出たと思っても、泥や砂が混じって全く飲めませんでした。その他、道路の通行止め、窃盗、特にヒビが入り倒壊の恐れがある家での睡眠は不安でした。

また、救援物資は急には届きません。大体三〜四日



かかります。日頃から備蓄をする必要があり。そして備蓄品は出し惜しみをせず、皆で分け合う気持ちが必要です。自らを助ける自助も必要ですが、高齢の方や障害をお持ちの方、妊婦さん、乳幼児はそうはいきません。共助のために「気づき、考え、実行する」ことが大切です。



### 今こそ防災教育を

子供達は今、どのように感じているのか。また地震が来るのかな、バラバラになるのかな、どこに住むんだろう、地震が来るのは今日か明日かな。子供達には正しい知識と、正しい行動というものが必要になります。今こそ、この防災教育が大事なんじゃないかなと思っております。

そこで青少年赤十字です。教材の提供であったり、人材派遣であったり、プログラムの提供という意味で、私は大変お世話になっております。

### 熊本県青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターでの防災教育

熊本県では二〇一五年から、トレセンで防災教育の時間を取っています。今年度のトレセンでは、皆さんにやって頂いた竹ひごタワーを行いました。

その経験が、熊本地震の避難所生活で役に立ったそうです。

トレセン受講者が被災して、どんなことをしたのか。避難所での炊き出しや清掃、物資運搬等のボランティア活動、掲示板の活用、義援金の校内募金活動、避難所での子供の遊び相手や高齢者との交流をしたと報告を受けています。やはり、コミュニケーションをとるということ、これが防災教育の中では一番大切です。

当活動研究会には、佐藤貴文氏がお勤めの矢部中学校の校長、今村靖男氏も参加され、管理職の立場から、被災した時の対応等について次のことをお話されました。

- 一 職員・生徒の安否確認、家・学校の被害状況の確認を速やかに行う必要があります。
- 二 学校が避難所になった時は、色々な方が来られるため、用件や支援内容等を記録することが大切です。(来た人、用件等をデジタルで撮影するのが好ましいです。)
- 三 学校内が無秩序にならないよう、特に地域のリーダー的人物の協力を仰ぐことが大切です。
- 四 行政や教育委員会は様々な対応に追われるため、校長、教頭、学校の先生達が、避難所運営といった直接の対応にあたらざるを得なくなり



### 青少年赤十字防災教育モデル事業

青少年赤十字では、実践目標の一つである「健康・安全」のもと、防災教育を通して自然災害から青少年の健康と安全を守り、また、学校、地域、家庭における防災意識を高めることで、人間のいのちと健康、尊厳を守ることを目的として、プログラム及び教材の開発、研究を進めています。



青少年赤十字防災教育プログラム

#### 射水市立射北中学校をモデル校に指定

平成二十七・二十八年度のモデル校には全国から九校が指定され、射水市立射北中学校も指定されました。

同校は海岸部から約百メートルに位置しており生徒が自然災害等の危険に際して自らの命を守り抜くため「主体的に行動する態度」の育成、地域の防災関係機関や大学、研究機関等との連携体制の構築を目指し、モデル事業に取り組みました。その活動内容と成果をお伝えします。

#### 平成二十七年度の活動内容

- ◆緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練  
緊急地震速報受信システムの操作を全教職員が行えるよう講習会を行い、同システムを利用した避難訓練を実施しました。
- ◆地域住民による避難訓練  
学校が実施されている時に津波が発生したことを想定し、地域住民対象の避難訓練を実施しました。
- ◆ライフジャケットの着用と入水体験
- ◆全校集会で、東日本大震災の津波を説明
- ◆富山地方気象台と日本赤十字社富山県支部による防災セミナー

三月四日(金)、二年生を対象にセミナーを実施しました。富山地方気象台 地震津波防災官 八幡政志氏より、津波のメカニズムと身を守る方法を学び、日本赤十字社富山県支部 事業推進課長 坂井繁之氏より、東日本大震災での医療救護活動や救援活動の様子について学びました。



- ◆日本赤十字社作成の防災教育プログラム  
『まもるいのち ひろめるぼうさい』を活用した授業

#### 平成二十八年度の活動内容

- ◆防災体験学習施設「そなエリア東京」の訪問  
東京臨海広域防災公園にある「そなエリア東京」

にて、被災後の行動について考えました。

- ◆体験型学習施設「四季防災館」での災害体験
- ◆ハザードマップの作成
- ◆全校生徒・地域住民による炊き出し訓練、消防訓練

#### 富山国際大学教授による講演会

九月二十五日(日)、全校生徒と地域住民を対象に「平成二十八年度射北中学校防災学習」を実施しました。



炊き出し訓練では、下村赤十字奉仕団・射水市大江赤十字奉仕団・新湊中央赤十字奉仕団のご協力のもと、耐熱性の特殊ポリ製袋（ハイゼックス）に入れた米を沸騰した釜の中に投入し、炊き上がったご飯にカレーをかけて実食しました。

また、消防訓練では射水消防署にご協力頂き、担架での搬送、煙道体験、水消火器、放水等を体験しました。

最後に、「災害に備えて ボランティア経験から」と題して、富山国際大学 教授 才田春夫氏にご講演頂き、自助・共助・公助への理解を深めました。

#### 図書室の一角に防災関連の書籍コーナーを設置

東日本大震災以前の防災関連書籍、東日本大震災で被災された方のコメントが載った書籍、災害に備えてどうしたら良いのかを学べる書籍等、防災をテーマにした書籍コーナーを作りました。



#### 成果と課題

- ◆成果として感じられたのは次のとおりです。  
緊急地震速報受信システムを活用した避難訓練を通して、教職員、生徒が地震の規模や津波の発生状況を確認して避難できました。また、今後、地震が起きた場合の配慮事項を全職員で確認できました。
- ◆道徳の授業から、人と人が支え合い、助け合うことの意味や温かさを感じ、感謝と思いやりの心で人と接しようとする心情を育むことができました。
- ◆しかしながら、次のような課題も感じました。  
富山県は災害が少なく、実践に繋がるのか心配な先生や生徒がいることも感じられました。これまでの取組を今後も継続・伝承していく工夫が必要です。
- ◆将来的には地域の防災リーダーとして「防災力」を発揮する生徒が育つよう、地域と共に取り組んでいくプロジェクトを作る必要があると思われま

### 青少年赤十字活動推進校のご紹介

#### 活動推進校とは

学校教育における青少年赤十字の活動推進を行うい、加盟校における資質向上、未加盟校への啓発のため、二カ年に渡って青少年赤十字を研究している学校です。

平成二十八・二十九年度の指定は、富山市立新庄中学校、富山市立杉原中学校の二校です。

#### 〈富山市立新庄中学校〉

#### 地域を明るく！新庄中の地域貢献活動

本校では地域との交流を積極的に行い、地域と一体となって諸活動に取り組んでいます。その一つが「門松作り」です。今年も明るいお正月を迎えていただくよう、各部活動で門松を作り、校区の交番や地区センター、福祉施設等に届



門松贈呈



「夢発見『13歳の自分探し』」

けました。

また今年度は新たなキャリア教育として「夢発見『13歳の自分探し』」と題し、地域で働く人から職業に関する様々なお話を聞きました。たくさんの方の方に協力いただき、1年生が将来について考える有意義な経験をすることができました。

#### 〈富山市立杉原中学校〉

生徒会執行部と代議員会の共催で、挨拶運動を行っています。生徒会関係に役員や代議員に加えてボランティアで参加する生徒が集まり、登校してくる生徒とさわやかな挨拶を交わします。元気で明るい挨拶で始まる一日は気持ちのよいものです。

また、今年度は校舎をきれいにする活動として、3年生を中心に「きれいにし隊」を結成し、廊下の壁やドアのペンキ塗りを行いました。丁寧にマスキングをすることで、壁の汚れを取った後、白いペンキを順に塗っていきます。この活動によって、校舎は見違えるほど美しく生まれ変わりました。

